

戦国期における毛利氏の権力構造：毛利元清・元政・元康を中心として

石畑， 匡基

<https://hdl.handle.net/2324/1785342>

出版情報：九州大学，2016，博士（比較社会文化），課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

氏 名 : 石畑 匡基

論 文 名 : 戦国期における毛利氏の権力構造
—毛利元清・元政・元康を中心として—

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、これまで注目されることの少なかった毛利元就子息元清（四男）・元政（七男）・元康（八男）の分析を中心に、戦国期における毛利氏の権力構造を明かにすることを目的としている。

毛利氏に関してはこれまで膨大な研究史の蓄積がなされてきたが、従来の研究では官僚制機構とみなされた奉行人を対象とした研究が中心であった。かかる研究では元就子息は当主専制を阻害するもの、もしくは単に権威的な存在とされる傾向にあり、毛利氏が知行地を拡大させていくなかで彼ら元就子息がどのような役割を担ったのか必ずしも明かにされてはいない。しかしながら、彼らの子孫は江戸時代になると一門・家老として藩政運営において重要な役割を果たすことになる。ゆえに、戦国期のみではなく江戸期まで見通す長期的な視点に立脚するならば、戦国期の毛利氏の権力構造においても彼らが果たした役割を位置づける作業が不可欠といえるだろう。

第1章では元清による備中領支配について分析した。備中国は毛利氏の領国にとって国境であり、元清は同地に所在する猿懸城に在番するとともに知行地を有していた。猿懸城に入城した元清は他の毛利一族・庶家と同様に在名（地名）として穂田を名乗り、城の守備を担当した。なお、これまで彼は代官であり、当主の指示がなければ権限を行使し得ないと理解されてきたが、少なくとも自身の知行地においては課役賦課権や与力への知行宛行権を行使し得た点を明らかにした。

第2章では、そのような城番をつとめる元清がどのような軍事力＝家臣団を保持したのか考察した。彼の軍事力が史料上にどのように表記されていたか確認した上で大名より貸与された与力と自身と主従関係にある被官から構成された点に言及した。そのうち、被官については仮名・偏諱の授与や土地を媒介にした主従関係を構築しており、当主の公認に次第では貸与された与力についても被官とすることが可能であった点を解明した。

第3章では、元清と同様に在名（「末次」）を用いた元康を分析した。彼は、出雲富田城番をつとめたことで知られるが、それ以前の事跡及び在城中の知行地支配の様相は明らかではなかった。よって、元康の発給文書を収集して名字・官途・花押などの基礎事項を確認した。その上で、富田入城前に国衆相杜氏の養子となるが、兄元秋の「名代」として暫時富田在番を担ったことで、相杜家を手放していた点や、その後は出雲新山城在番をつとめたことを明らかにし、元康も毛利氏領国において以前から城番をつとめた事実を究明した。さらに、改めて富田城に在番した後は寺社領を召し上げ自身の家臣に分配するなど強力な支配を展開し毛利氏の地域支配に貢献した。

第4章では、安芸国衆天野氏の養子に入った点で上記の両名とは異なる性質を持つ元政がどのような軍事力＝「家中」を保持したか検討した。その「家中」が従来の天野家臣に加え、与力とみられる毛利家臣などから構成されており、備後神辺城に在番した元政の留守を守備するなど、こちらもやはり毛利氏の地域支配において重要な役割を担っていた点を明らかにした。

上記の成果により、元清・元康・元政が城番として領国内における重要拠点を守備していたことを解明したが、第5章ではその城郭がいかなる経営基盤によって維持されていたのか、「城領所」

に着目して考察を行った。その結果、経営基盤と考えられてきた「猿懸領」や「神辺領」は単なる地域呼称であり、実際は公領である城領所を反対給付とすることで家臣を城番に従事させた点を明らかにした。これは先行する大名大内氏でも確認でき、西国大名の特質として評価されよう。

ここまで戦国期の毛利氏の領域支配を中心に分析を加えてきた。第6章では、前述したように江戸期への長期的な視点に立脚し、豊臣政権へ服属した後の毛利氏の権力構造について元政と元康の動向から展望的に言及した。その結果、従来は奉行人を用いた当主専制的な行政運営がなされたと評価される「大陸侵攻」（いわゆる朝鮮出兵）の最中やその後においても元康が行政運営に参画していることを論究した。これは江戸期の家老による藩政運営の萌芽と推定できよう。

以上の本研究の成果によって、これまでその位置づけがあいまいであった元就子息元清・元政・元康が戦国期の毛利氏にとっては城番という領国支配の中で軍事的に重要な役割を担ったことが明らかになった。また彼らは単なる軍事力としてだけではなく、豊臣政権への服属後には官僚機構とされる奉行人と共に行政運営にも参画する。ゆえに、戦国期の段階ですでに毛利氏は実務的にも軍事的にも強固な権力体となることを企図していたと想定され、元就子息の軍事的な側面を究明した本研究には意義があると考えられる。